

赤 いた た あ る

知的障がい者と共に生きる

小
助
川
仁



生まれてきてよかったと思える
人生を送る知恵とは——？

知的障がい者施設の指導員として心血を注いだ36年間
その軌跡を、実践してきた豊富な事例とともに紹介

文芸社 ● 定価(本体1,500円+税)

電子書籍の操作について

- ・ 目次をクリックすると、該当ページまで移動します。
また、移動先ページの見出しをクリックすると、目次に戻ります。
- ・ 「十字キー」やマウスのホイールを使用して読み進めます。
- ・ 「フルスクリーンモード」に設定すると、読みやすくなります。

「フルスクリーンモード」設定方法

メニューバー「表示」→「フルスクリーンモード」

Escキーで元の表示に戻ります。

※パソコン環境により、「フルスクリーンモード」が使用できない場合があります。

心
の
し
ん
じ
ん
の
こ
ろ

酒

小倉大行庵 大阿闍梨

總一和尙 長壽院

酒井 快哉



著者と親交のある比叡山大阿闍梨酒井雄哉師が本書の出版に際して贈ってくださった書。
著者が「いつくしみの心」をもって人間のつながりを大切に生きてきたことを表現してくださった。

赤いたる

知的障がい者と共に生きる

小助川仁



文芸社

小助川さんの『赤いたおる』の発刊に寄せて

貧困問題研究会代表・同志社大学名誉教授 三塚 武男

何よりも、このたび、石炭「ヤマ」での労働と「炭住」でのくらしを離れて知的障がい者福祉施設での仕事と学習の「あゆみ」を、ふだん使っている言葉でまとめた努力に対し、敬意とよろこびの拍手を送ります。発刊を楽しみにしていましたので、本当にうれしく思います。

貧困問題研究会は来年で発足三十周年を迎えますが、小助川さんはスタートしてまもなく、「オレは社会福祉について何も知らない」と言いながら、亀岡から「オイの坂（峠）」を越えて毎回参加するようになりました。

研究会でも、「小助川さんの実践に何を学ぶか」というテーマで検討したことがあります

ます。そして明らかになったのは、くらしの場で根気よく対話を重ね、ヨコの交流と協力の輪を広げてきたことです。

小助川さんは現場で工夫しながら、全力で次つぎ仕事をこなしてきました。いずれも、その場限りの思いつきや小手先の個別的な「援助」ではありません。つねに力を合わせて人間のいのちを守り、育てる営み（労働）を根底にすえ、くらしと労働の条件を結びつけ、そして知的障がい者と地域の人たちのくらしと知恵に学ぶ努力を積み重ねています。

発想と展開が独創的で、「理にかなっている」ので、具体的な取り組みに広がりや発展があります。それは労働時間が長く、疲れとストレスがたまるような社会福祉施設の仕事のなかで、日頃から取り組む目的と課題を明確にして、活動や実践とその基本にある考えを記録や論文の形にしているからできたと思います。

本書は、すばらしい「実践の記録」であると同時に、人間として生きるとういうことか、たえず自分に問いかけ、学習し、働いて生きている人たちへの信頼と感謝の気持ちをかめて生きている「人間の記録」でもあります。障害のある人とその家族や社会福祉、教育、雇用、医療、リハビリテーションなどにかかわっている人たちが

はじめ、多くの方がたに、ぜひ読んでいただきたいと思ひます。

二〇〇六年三月十八日・合宿から帰って

人生の書

元京都新聞本社総合メディアセンター長 今江 豊

“待たれた一冊”といえようか。少なくとも著者をいささか知る者の一人として思う。新聞記者として、友人として小助川氏の活動を見聞きし、記事にもさせてもらったが、通読して、改めてその凄さ、豊かさ、純粹さに驚き、頭が下がる。

何がそれほど凄いのか、どう豊かで純粹なのか。情熱、アイディア、実行力……。いずれも並はずれているのだ。とても地方の一福祉施設指導員の所業とは思えないほどだ。ただ学校で福祉を学んで、現場に出てきた普通の職員なら、とてもできないだろう。

中身は事例集としていくつか紹介されている。風呂嫌いの寮生を冷凍ジュースで誘

って入浴させる。コイのえさやりと称して畑の青虫取りをする作戦。盗癖者に、犯行しそうな時間帯にテープ音楽を聞かせて、やめさせる指導……。どの事例も、まるで物語のように興味深い。内容豊かで、一つひとつそれだけで映画にも講演の材料としても使えるほどだ。

こうした著者の並はずれた福祉へのエネルギー（量的にも質的にも）は、どこから生まれるのか。もって生まれたものか、学習のたまものか。おそらく両面あるうが、源泉に寒冷地北海道での幼少期、命をかけてきた炭鉱夫の青年期の生活、職業体験があるのだろう。

今「志」が失われ、拝金主義がはびこる時代。自分の栄達、損得を度外視して障がい者指導に裸で一途に取り組んだ記録は、福祉関係者だけではなく、若者ら広く一般の人に読んでもらいたい「人生の書」でもある。

はじめに

知的障害があるからといって、自らすすんで施設に入る人はおりません。家族や地域の事情で、やむを得ず施設を利用している人がほとんどなのです。そして、いったん入所してしまうと、限られた空間の中で制約の多い生活を強いられることになりがちです。

私がつねに心がけていることは、「福祉とは」「障がい者とは」といった固定観念をもたず、「二人の人間とは」と問いかけることです。

ですから、私は福祉を知りません。また、知的障害をもった人たちも福祉を知りません。福祉を知らない者同士が、人間としてもてる力を出し合って正直に生きてきた足跡を本書にまとめました。

障害をもっている方やそのご家族、福祉関係者だけではなく、現在社会問題となっている、いじめや不登校に悩んでいる方、育児に悩んでいる方など、どなたにも読ん

でいただければ幸いです。そのためにも、本書では、福祉用語に多い外来語は使わないように心がけました。

もくじ

小助川さんの『赤いたおる』の発刊に寄せて	3
人生の書	
元京都新聞本社総合メディアセンター長 今江 豊	6

はじめに	8
------	---

第一章 福祉なんて何も知らなかった	19
.....

思いがけずに福祉の世界へ	19
側溝掘りから始めた	28
基礎工事で自立を目指す	33
私は生まれたことに感謝できない	40
出口光平先生との出会い	47

第二章 労働を通して地域の中へ

- 立ちはだかるブロック塀 51
- 悪戦苦闘の日々が続く 56
- 百円のお金があつたならば？ 60
- 地域の人を先生に 66
- 寮生の結婚と死 73

.....

51

第三章 ついに塀は取り壊された

- 広がる活動の輪 85
- 同じ人間として正直にぶつかった 89
- 地域に認められる農耕へ 95
- 感動の第一投を振り下ろす 101
- 地域からの成績表 107

.....

85

有機質の堆肥づくりに挑戦 111

地域の力を結集した減塩味噌づくり

120

世界に羽ばたく寮生の絵 125

第四章 炭鉱の町再び

..... 133

赤い手袋を忘れない 133

いのち
生命を守り合うのが仕事だった 139

第五章

生命を守り育む実践 143

自閉的傾向の強いS子さんの場合

個性をつかんで参加しやすい条件を整える 144

コンプレックスの原因となる肥満解消への取り組み

もつとも説得力をもつ人に指導を頼む① 147

顔を洗わない女性の場合

もつとも説得力をもつ人に指導を頼む② 150

青虫を鯉の餌にする発想の転換

付加価値をつければ、やる気が起きる

153

長髪で洗髪嫌いのY君を短髪にさせた一言

父母や親族の力を借りる

156

他人を「アホ」呼ばわりするR君、男言葉を使うT子さんたちの対処法

地域の支援を掘り起こす

160

U君の無断外出は手紙が届く楽しみで解消

ボランティアや実習生に支援を頼む

164

街の散髪屋で散髪できる寮生たちの喜びの効果

療育の目的をはっきり説明する

168

風呂嫌いのP君と冷凍缶ジュースで乾杯

もつとおいしく飲める環境を整える

171

女性の下着下口癖のあるQ君を歌声テープで魅了する

より魅力的なものを示して関心をそらせる

174

夜中に奇声をあげるX君には、過重労働が安眠の特効薬だった

労働によって生活のリズムを整える

178

おそろいのパンツで、パンツ嫌いのC君の悪習を直す
焦らず・叱らず・根気よく 181

盗癖、無断外出のDさんに与えた屏風絵の大作 びょうぶ

寮生が生きがいを感じるようにする 184

さまざまな工夫で地域との交流を深める 187

第六章 人間らしく共に生きる

帰りたくても帰れない 192

社会的な役割を果たす施設へ 195

障がい者が健常者の健康を守る仕事を求めて 197

人間らしく生きるとは 201

障がい者自身が誤った認識を変革していく 204

自立できる仕事を生み出す 206

待ちに待った歩道ができる 209

各国の人が交流し合うユースホステルに 212

道 ひと筋に

華頂短期大学名誉教授

豊田慶治

220

「赤いたおる」の実践

同志社大学教授

井岡 勉

223

地域に根ざした福祉を目指してこられた先駆的実践者

京都文教短期大学教授

安藤和彦

225

いのちとくらしの主人公を育む実践

同朋大学社会福祉学部教授

林 博幸

227

「関係づくりのプロ」に見る実践のあざやかさ

華頂短期大学社会福祉学科教授

藤井伸生

229

原点としての小助川先生

大谷大学助教授

山下憲昭

231

社会福祉の現場が求めている答えを活写した一冊

大谷大学専任講師

志藤修史

233

共に築く生命のパワー 福祉の原点を求めて

元龍谷大学教授

飯田一道

235

小助川 仁 年譜

239

恩師 出口光平先生

略年譜

248

赤いたおる——知的障がい者と共に生きる

*本書では、「〱障害者」など、障害のある人を表わす場合は「〱障がい者」の表記にさせていただきました。

*登場人物の一部を仮名とさせていただきますました。

第一章 福祉なんて何も知らなかった

思いがけずに福祉の世界へ

「ぼくにはこの仕事はできません。もう郷里に帰ります」

「えっ!? きのお来たばかりじゃないか」

あまりにも早い彼の辞意に私は驚き、

「お母さんが、あの真新しい布団を送ってくれたんだろ。こんなにすぐに辞めてどうするんだ。いっしょにがんばろう」

と言って引き止めたが、彼の決意は固かった。

某福祉大学を卒業した青木君は、高い志をもってこのコロニーに就職したはずだった。それが、わずか二日でギブアップとは……。奇声を上げて走り回ったり、スコッ

プを振りかざして大喧嘩したりしている園生の姿を見て、すっかり怖気おしげづいてしまったようだった。

——これはえらいところに来てしまった。

内心、私はそう思った。

福祉を学んだ彼でさえ勤まらないのに、福祉の「ふ」の字も知らない私が、この先、この世界でやっていけるのだろうか。言い知れぬ不安がこみあげてきた。しかし、妻も子もいる私は、ここで逃げ帰るわけにはいかなかった。

四月に入ったとはいえ、北海道の春はまだ遠い。人里離れた山の中の雑木は寒ざむとしていて、冬の色を濃くとどめていた。布団を施設に寄付し、逃げるように親元に帰っていく彼の後ろ姿を、私は一人取り残されたような寂しい気持ちで見送った。

昭和四十五年、二十九歳の春のことである。

その一年前、私は病院のベッドの上で、勤務先の炭鉱が閉山したという通知を受け取った。

とうとう来るべきものが来た。覚悟はしていたものの、炭鉱の町に生まれ育ち、中

学を卒業してから十三年間、日本のエネルギー・石炭資源の生産を支えているのだという誇りをもって懸命に働いてきた私には、とても寂しい知らせだった。

そのころ、国のエネルギー政策の転換に伴い、北海道の炭鉱は次つぎに閉山に追い込まれていた。ほかの炭鉱から「来ないか」という誘いを受けてはいたが、もう炭鉱マンには未来はない。私は誘いを断り、第二の人生を歩む決心をしたのである。

大量に出た炭鉱離職者のために、国は手厚い施策を打ち出していた。二LDKの雇用促進住宅には二千二百円の家賃で入れたし、職業訓練校に入る人には訓練手当を増額してくれたのだ。

私はそれに乗ることに決め、肺炎が癒えて退院したのを機に、一か月遅れで職業訓練校に入学した。配管工の資格が取れるコースを選んだのだが、まわりは中学を卒業したばかりの若い子がほとんどだった。

半年は学科の勉強、残りの半年は工事現場で実技講習を受けるというスケジュールになっていた。前期は無事に終わり、実習に入るときに十人ずつぐらいの班に分けられた。私は年長者だったので、班長に選ばれたが、このとき、

——ええーっ、この子たちといっしょにやるのか。だいじょうぶかいな。

なんとなくイヤな予感がしたのである。

現場に入ると、その予感があっさり現実のものとなった。若いせいか、みんなさっぱり仕事に身が入らないのである。ただ、ぶらぶらして、おしゃべりしている。私は十三年間、炭鋳マンとして骨身を惜しまず働いてきた。汗水垂らして労働するのがあたりまえだと思っていたし、班長としての責任感もあり、これはなんとかしなければと真剣に考えた。

説教したり怒鳴りつけたりするのではなく、自発的に仕事をするようにもっていきたい。そのためにはどう言うのがいちばんいいのだろう。この子たちが今、もっとも関心があるのはどんなことだろう。自分が彼らの年齢のときに何に興味があったのか、過去を振り返ってみた。

——そうか、女の子だ。

作戦は決まった。私は昼休みに、まず三人の若者にこう声をかけてみた。

「女の子のナンパのしかたを教えてやるから、ちょっと喫茶店に行こう」

突然の誘いにびっくりしたようだったが、みな興味津津といった様子でついてきた。「いいか、喫茶店に入ったら、フラフラしないで迷わずに座るんだぜ。そのときに、

途中省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

著者プロフィール

小助川 仁 (こすけがわ ひとし)

- 昭和16年(1941)3月 北海道夕張市生まれ。
- 昭和31年(1956)4月 北海道・羽幌炭鉱に就職。
- 昭和42年(1967)12月 国家試験「甲種坑内保安係員試験」合格。
- 昭和44年(1969)5月 太刀別炭鉱閉山により離職。
5月 北海道立札幌専修学校職業訓練校入学。
- 昭和45年(1970)3月 同校配管科修了。
4月 函館市の社会福祉法人侑愛会「おしまコロニー」に就職。
- 昭和48年(1973)4月 生涯の恩師出口光平先生と出会う。
4月 社会福祉法人信光会の更生施設「松花苑みずのき寮」就職。
- 昭和49年(1974)6月 国立秩父学園附属保護指導職員養成所研修部受講。
7月 同所修了。
- 昭和55年(1980)11月 厚生省委託による全国社会福祉協議会社会福祉研修センター「昭和55年度第4回社会福祉施設主任生活指導員研修会所定の課程」修了。
- 昭和56年(1981)6月 「貧困問題研究会」(代表・同志社大学教授三塚武男氏)に参加。
- 昭和58年(1983)3月 「NHK厚生文化事業団心身障害福祉賞」第二部門最優秀賞受賞：実践報告「施設の社会化をめざして一開拓的役割を果たす施設の取り組みー」
- 平成17年(2005)4月 本書出版に専念するため、定年1年前に「みずのき」退職。



腰に下げた赤いたおる (右が著者)

赤いたおる 知的障がい者と共に生きる

2006年10月15日 電子出版発行

著 者 小助川 仁
発 行 者 瓜谷 綱延
発 行 所 株式会社文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1
電話 03-5369-3060 (編集)
03-5369-2299 (販売)

<http://www.boon-gate.com>

© Hitoshi Kosukegawa 2006 Corded in Japan

ISBN4-286-01167-4

JASRAC 出0606688-601

(文芸社発行の通常書籍(紙の本)については、全国書店でお尋ねいただくか、「文芸社ON-LINE」
サイト、<http://www.bungeisha.co.jp>を御参照ください。)

新 06.10.04 Hicom